

学校評価シート（自己評価）

十文字女子大附属幼稚園

1、園の教育目標

これからの時代、小学校以降の学校でも、社会に出てからも、自分で考えて実際に行動しながら自分のため、世のために学び続けていく人間が求められる。教育の原点である幼稚園において、自分で何をするか、どう過ごすかを決めていく経験を重ねていくことが、十文字学園の建学の精神「身をきたえ心きたえて世の中にたちてかひある人といきなむ」に基づくことになる。

本園では、遊びを中心とした生活の中で、自ら考え行動する力、人とともに取り組む力を育むことを目指し、①自発性の重視、②人と関わる力の育成、③環境を生かした生活、④保護者との連携に取り組む。

2、具体的な目標や計画

1、本園の魅力を発信し、各年度の入園者数の定員を確保する

2、教育・保育活動を充実させる

- ・保育者自身の保育力向上を目指して自己研鑽に努め、保育全体の質向上につなげる
- ・チーム幼稚園を目指して、協力して保育に当たれる体制・環境を構築する
- ・園児の健康・安全が十分守れる体制・環境を整える

3、保護者との連携を推進する。

- ・保護者が園と関わる機会を増やす。
- ・保護者の育児向上につながる情報を提供する。
- ・幼児一人ひとりの安定した生活を守りながら、保護者の多様なニーズに対応していく

4、大学との連携を推進する

- ・幼児教育を目指す学生の実習の機会に応じる
- ・大学の授業・教員の研究への協力・支援に努める
- ・大学教員の専門知識や経験を園の教育・保育内容向上に活用する

5、地域との連携を推進する

- ・近隣の様々な関係者との連携、連帯を深める。
- ・地域への情報発信とともに、地域からの意見聴取の機会を設ける

3、評価項目の取組及び達成状況

評価項目	結果 (※)	結果の理由
本園の魅力を発信し、各年度の入園者数の定員を確保する	C	地域の未就園児が園庭で遊べる日を設けた。園での生活や遊びを感じ在園児との触れ合う良い機会となった。園庭開放する日をさらに増やし、多くの未就園児や保護者を迎え入れられるようにしたい。いちご組の体験会を今年度中に実施し参加者の増加を目指している。

保育者自身の保育力向上を目指して自己研鑽に努め、保育全体の質向上につなげる。	A	クラスごと・学年ごと・園全体で保育について話し合う機会や園内研修を重ね、一人ひとりの子どもの今の生活・遊びを大事にしつつ体験の幅をひろげる保育実践が実施できた。保護者アンケートの結果からも本園の保育の質・保育力が高く評価された。
チーム幼稚園を目指して、協力して保育に当たれる体制・環境を構築する	A	各学年の保育について日々話しあい、毎週職員会で情報共有してきた。個に合わせた対応が必要な場合フリー保育者の援助が重要となるので細かく伝えあって対応を検討してきた。次年度からきりん組の時間延長、長期期間中の開室を実施することが決まった。きりん組担当教員と園の教員の情報共有・共通理解が課題である。
園児の健康・安全が十分守れる体制・環境を整える	A	保健計画・学校安全計画を見直し刷新した。今年度から全職員で担当箇所を決め定期点検を実施し安全な環境確保を目指した。自己判断せずに保育中・保育後の報告・連絡・相談を重視して迅速かつ適切な対応がとれるよう努めた。大学の保健管理センターとの連携(指示を仰ぐ、連れていく、駆け付けてもらうなど)を強化した。
保護者が園と関わる機会を増やす	A	コロナの影響で減っていた保護者同士の交流(給食試食会・おもちゃづくり・クラスコンサート・茶話会)を実施できた。園庭開放中に有志の親子を募り行事準備・環境整備を教員と協力して実施した。保護者が気軽に園に相談できる機会を増やせるようにしていきたい。全員の保護者が集まる機会(始業式・終業式など)が持てるようにしていきたい。
保護者の育児向上につながる情報・体験を提供する	B	日々の会話・懇談会・ブログ・お便りなどで子どもたちの育ちを保護者に伝えてきた。園庭開放や保護者参加の行事の中で保護者に園の生活を体験してもらうことで理解が深められるようになってきた。制限はありながらも、父母会主催の取り組みを実施できたことは良かった。父母会との意思疎通が不十分だった時もあり、協力体制の構築が課題である。
幼児一人ひとりの安定した生活を守りながら、保護者の多様なニーズに対応していく	B	預かり保育の日数や時間を増やし、出来る限り要望に応えられるよう努力した。入園児数の減少傾向に歯止めをかける対策の1つとして次年度から預かり保育の時間延長、長期休暇中の開室を決めた。保護者の要望に応えつつも、子どもたちの心身に負担のかからないやり方を模索していく必要がある。
大学との連携を推進する	A	園全体で実習内容について共有し、実習生の適切な体験・振り返りに繋げることができた。園の保育動画を大学主催夏の研究会で発信、学内保育公開を2回実施、園内研修に講師・アドバイザーとして大学教員招致など機会をつくり、大学教員から助言を受け保育の質向上につなげた。
地域との連携を推進する	A	地域の未就園児親子に対する園庭開放を始めた。幼稚園を知ってもらう良い機会にもなるので、今後も引き続き機会を広げていきたい。3年ぶりに野火止小学校と直接交流する機会が設けられた。小学校生活へ滑らかに接続できるよう地域の小学校との連携を大事にしたい。地域の療育施設とのつながりができ本園参観及び情報共有の機会をもった。

4、具体的な目標や計画の総合的な評価結果

結 果	理 由
B	コロナ禍の保育も3年目となり、見直してきた園生活が定着して、園生活・保育活動は充実していた。内容等を十分検討して2年見合わせてきた保護者の活動も実施できた。保健管理センターとの連携強化、「保育公開」2回実施、園の保育動画を幼児教育学科の夏研に提供、大学教員を園内研講師に招致、福祉学科の授業協力など、大学との連携は強化できた。未就園児への園庭開放、地域の療育機関との連携など、地域との連携もすすめられた。新しい取り組みに着手したが、入園者数の確保においては十分な成果にはつながらなかった。次年度に向けて園児確保につながるよう取り組み（いちご組の体験会、保護者の声収集）をすでに開始している。

○結果(※)について

A	十分達成されている
B	達成されている
C	取り組まれているが、成果が十分でない
D	取組が不十分である

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取り組み方法
各年度の入園者数の定員を確保する	いちご組の参加者を増やす、本園の良さを地域の未就園児の親に周知する、預かり保育きりん組の保育を充実させるなど、具体的な対策を着実に実施して定員数の確保につなげる。
保育者のさらなる資質向上を目指す	大学や外部に開く「保育公開」を充実させ、より開かれた幼稚園づくりに努め、園の保育改善をさらに進める。きりん組の時間延長、長期休暇中の開室をするにあたり「子ども達にとって」という視点を最優先して、きりん組担当教員と園の教員で情報共有・共通理解した上で保育内容・環境を十分検討していく。
保護者が園と関わる機会を増やす	実施した保護者アンケートの結果を受け止め、園運営に生かしていく。園の保育に保護者が参加する機会をさらに増やし保護者同士の交流を充実させていく。保護者が気軽に相談したり、保護者同士で支え合ったりできるよう、懇談や相談の機会を定期的に設定する。保護者の相談・要望に対して、園としてどう考えどう対応をしていくかを丁寧に保護者に戻していく。
近隣の様々な関係者との連携、連帯を深める。	地域連携プロジェクトに協力し、園ができる役割を担うことで地域とのつながりを深める。未就園児に対しての園庭開放に加えて、地域とつながる取り組みを新たに模索する。15年前から継続している「はらっぱ」（十文字学園女子大学の教員、外部講師による講演会）を地域に広く発信して、近隣の子育て家庭の参加を広げていく。

学校評価シート（学校関係者評価）

幼稚園 学校関係者評価委員会

日 時 令和5年 3月6日（月）

15:30～17:00（1時間半）

出席者 評価委員7人

評価委員（7）人

1. 自己評価で設定した目標・計画、評価項目の設定は適切であったか

教育・保育活動の目標は、幼稚園教育の本体であり、園の組織・健康安全・教員の資質向上を図ろうとする視点が設定されており適切である。また、大学との連携は本園の強みであり、更なる深化充実を図ろうとしている。このように目標・計画が適切に立てられており、子どもとの間で評価を裏付ける具体的な取り組みが豊かに展開されていたことが園の評価シート（自己評価）から伺える。

2. 評価結果の内容は適切であったか

自己評価結果のまとめから、教員の意見を多く取り上げていることが見て取れる。評価に際して、十分できたこと・不十分だったことの両方を素直に振り返っている。保護者アンケート実施2年目となるが、保護者からの意見を参考にしながら評価結果としている。評価結果の内容検討だけにとどめず、今後の目標・計画の設定につなげている。

3. 今後取り組むべき課題は適切に設定されているか

設定されている中期目標に沿って、今年度の振り返りから導き出された課題や保護者の声を丁寧を受け止め、新たな視点で出された課題を適切に設定している。

4. 今後取り組むべき課題は適切に行われているか

一つひとつの項目から課題解決のための具体的な取り組みが見てとれる。課題が見つかった時点から取り組みがはじまっていることが自己評価の文面から伺えるが、やればやるだけ効果はあるが、どこまで取り組むかの見極めも必要である。